

夏目漱石研究

——『心』を中心に——

依 田 詩 穂 里

1

夏目漱石は明治時代を代表する作家のひとりである。『吾輩は猫である』や『門』、『道草』など現代でも多くの人々に親しまれている作品を多数執筆した。今回の漱石研究にあたって、漱石の作品の中でも後期に書かれた作品である『心』に注目していきたい。

夏目漱石の『心』（大正三年四月二十日から八月十一日まで、『心 先生の遺書』を朝日新聞に掲載。同年九月、岩波書店より『こころ』出版）は、「私」と「K」と「お嬢さん」の三角関係を描いた作品であるという見方をされることが多い。しかし、それは『心』の一部である。『心』の中には、新しい考え方と古い考え方が混ざり合っていく社会の様子が登場人物の考え方と人間関係に反映されている一面もある。「先生」と「K」の関係でも、「私」と「先生」の関係でも、新しい考え方を持つ人物が先の時代へ進んでいるのと同時に、古い考えを持った人物からの影響は多少なりとも受けている。そこで『心』の作品研究をするにあたり夏目漱石が人生のなかでも、新しい時代を見ることに強く影響を与えたと思われる英国留学についてと留学中に漱石が体験した力ネ社会に関する考え方に注目したい。

夏目漱石が生きた明治時代から大正時代にかけては西欧文明の流入が精力的に進められていた時代であり、日本の中で海外から入ってきた共和制と日本に古くから存在する天皇制という異なる社会制度が混ざり合っていく時代でもあった。漱石自身も英国留学を通じて、日本とは異なる西欧の力ネ社会を経験している。その体験からか『心』には力ネに

関する言及が所々に見られる。「先生」は「私」に父親の病氣について尋ね、遺産の相続問題は父親が生きているうちに解決しておくように忠告をする。その後に「私」から、人が悪人になる「いざといふ間際」(上 二九)とはどういう場合を指すのかという疑問に対して「先生」は、「金さ君。金を見ると、どんな君子でもすぐ悪人になるのさ」(上 二九)と返答する。この「先生」の言葉は学生時代に叔父に両親の遺産を横領された経験によるものである。「先生」と叔父の間に発生した金銭問題が「先生」の思考に影響を与えている。また「K」も金銭面で苦勞している。「K」のこゝとを医者にするつもりで東京へ出した養父母を欺いた結果、養家先からは学費を絶たれ、実家からは勘当されてしまう。「K」もまた金に苦しんでいる人物である。「心」の作中で金について言及されているのはこの二人だけではない。「私」の父親は「私」に対して、「昔の親は子に食はせて貰つたのに、今の親は子に食はれる丈だ」(中 八)と小言を言っている。このように『心』の作中には人の生活の中と切り離せないものとして、金の問題が随所にちりばめられている。漱石は英国留学の結果、天皇制を取る日本文明と共和制を取る西欧文明の両方を体験した。そしてその二つの社会体制を知ったということは漱石に少なからず衝撃を与え、日本がこれまでとってきた考え方も変っていくことを示した。江藤淳は『人と文学』の中で、

それからというものの、彼はエゴイズムと愛の不可能性という宿痾に悩む孤独な近代人として生きなければならなかったが、明治天皇の崩御と乃木大将の殉死という二大事件のあとで、彼は突然、いわゆる「明治の精神」が、彼の内部で全く死に絶えてはいなかったことを悟らねばならなかった。今、あの偉大な時代の全価値体系の影が、漱石の暗い、苦悩に充ちた過去から浮びあがり、かつて愛した者の幽霊のように漱石に微笑みかけていた。幽霊は、あるいはこういつたかも知れない。

「私のところに来なさい」

漱石は肯いた。彼は、自分の一部が、おそらくは小説の主人公のかたちで、「明治の精神」に殉じられることを知ったのである。

と書いている。桶谷秀昭は『淋しい「明治の精神」——『心』のなかで右の江藤淳の文章を引用し、「漱石が『こゝ

ろ』の先生を書くことで、古い日本の伝統的な倫理である「明治の精神」に、自分の一部を殉じさせたことは、おそらくたしかである。」と同意しつつも、

その古い「明治の精神」は、遠い以前、青年及び壮年期の漱石に鈍痛を与えたことも事実である。そして漱石の中の別の一部、「自分本位」のモラルに生き、「自由と独立と己れ」の新しいもう一つの「明治の精神」が、自分を一瞬おびやかし、自分を招く亡霊を、明治の時代の終焉とともに背後に押し遣ったにちがいない^三。

としている。これらの先行研究から、夏目漱石に英国での経験が影響を与えたのは力ネに関する考えばかりではないことが伺える。

すなわち『心』には、古い日本の考えが新しい西欧の考え方に移り変わっていく様子が書かれているのではないか。漱石が『心』の執筆に取り掛かったのは大正三年（一九一四）のことだった。津田青楓宛ての手紙（三月二十九日）には最初、『心』を四月十日頃から書く積もりでいる」と書いたが、四月十四日の寺田虎彦宛の手紙で「日一日となまけ未だ着手未仕候」と、『心』の執筆に取り掛かっていないことを告げている。そのような中『心』「先生の遺書」は四月二十日、『東京朝日新聞』と『大阪朝日新聞』に掲載され、連載は八月十一日まで百十回に亘って続いた。新聞での連載が終了した後、九月二十日に岩波書店から『心』が出版された。『心』の出版にあたって漱石自身が序文を書き、表紙の石鼓文を橋口貢から贈られた拓本をもとにして自分でデザインし、更に箱、題字、見返し、扉、奥付、朱印、検印まで全てを考案執筆した。これらのことから漱石の『心』の出版に対するこだわりが見られる。

『心』について小田切進は『新潮日本文学アルバム2 夏目漱石』の中で以下のように評している。

この小説で漱石は、人間が遂に自我の醜悪と罪から逃れられず、罪を償うためには死しか残されていない、という考えを示している。人間不信の、冷たく凍りつくような世界だ。しかしもともと「先生」は人をまた愛さないではいられない人だった。「先生」は遺書に「私の心臓を立割つて、温かく流れる血潮を啜らう^す」とした「私」の真面目さに動かされて秘密を書きのこしてみずから生命を断つたのだった。そうした愛と不信とを同時にもつ人間内部の矛盾と、暗黒から抜けでることが出来ずに苦悩する知識人の姿を、透きとおるような文章で的確にとらえてい

る。その暗さにもかかわらず、国民のあいだで広く読まれ、とくに若い読者に深い感銘をあたえる作となっている。

2

漱石が生きた明治・大正期は、日本の中に西欧文明を輸入しようと国家として活動が活発にされていた時代である。このことは漱石が文部省から命を受けて英国に留学したことからも分かる。日本に西欧の考え方が入ってきたことに伴って、西欧の資本主義の考え方も日本に入ってきた。当時の先進国の一つである英国に滞在し、直接西欧文明に触れて生活していた漱石にとって資本主義社会から受けた衝撃は大きかったようである。『心』の中でも至るところに金銭的な問題についての言及がなされているのは、英国留学で資本主義社会の中で生活していた経験や留学中の資金不足の経験から、人の生活と金銭について考えさせられたことも関係しているように思える。漱石は英国留学中、留学費不足が影響し次第に精神的な余裕もなくなっていた。金銭的に苦しいという状態は、漱石にあらゆることを切り詰めていかなければならないという緊張状態を引き起こしていたのである。藤田榮一は『漱石と異文化体験』で漱石が藤代禎輔に送った、ロンドン大学へ行きたくないという心境を述べた手紙から当時の心情を考察している。

彼の決心の根底に金の余裕があれば万事多少の無駄や余裕も許されるが、金に困っているという現実からすれば時間も研修の仕方も研修の費用のすべてについて切りつめ、一切の無駄をはぶいた生活をしなければならないという異文化社会で生きる者特有の緊張感と切迫感があった。金の不足は彼の心を抑圧する重大な原因であった。

また藤田榮一は「西洋文明は物質文明の最も直接的な価値である豊かさを象徴する富によって人間を支配する。金銭に恵まれた者が金の力によつて自由を謳歌し、欲望を満たし、その一方で他人を思うままに操ることができる。」としている。さらに、そのような中で金銭的に切迫した環境を余儀無くされた漱石の視点から英国社会を観察すれば、それは批判的なものにならざるを得ないとも言及している。

物質文明万能主義の社会は漱石の親しみ、その人生観や価値観を形成する基盤となった漢籍の世界や禅や武士道の

倫理感や俳句や茶道のおしえる風雅の幽玄の世界とは異なるものである。彼は貧しい状況にあつて、物質文明の拝金主義の文化や価値観にとうてい同化することはできない。自らの金銭的欠乏により生じた窮乏感と物質文明の栄華を対比させて、漱石はイギリス社会とその文化を痛烈に批判する。^(一)

漱石自身も西欧文明や金銭について考えたことを明治三十四年（四月以降）の「断片八」に以下のように記している。^(二)

- (一) 金の有力なるを知りし事
- (二) 金の有力なるを知ると同時に金あるものが勢力を得し事
- (三) 其金あるものゝ多数は無学無知野鄙なる事
- (四) 無学不徳義にても金あれば世に勢力を有するに至る事を事实に示したる故国民は窮屈なる徳義を棄て只金をとりにて威張らんとするに至りし事
- (五) 自由主義は秩序を壊乱せる事
- (六) 其結果愚なるもの無教育なるもの齢するに足らざるもの不徳儀のものをも士大夫の社会に入れたる事
- (七) 昔時は金の力を以て社会的の地位は高まらざりし事御用達是一個の賤業にして金ある為め尊敬は受けざりし事
- (八) 猿が手を持つから始めて「クライブ」に終る教育の恐るべき事

これらのことから、第二章では「先生」と「私」のそれぞれの周辺に書き表されたカネについての描写に着目し、漱石のカネについての考え方を考察していく。

3

『心』の『上 先生と私』の中で「先生」は「私」に二つの事柄について言及し、アドバイスをを行っている。一つは恋愛について。もう一つは金についてである。特に金銭については「先生」が直接「私」に語っている場面が多い。恋

愛については、「聞きこえました。恋の満足を味はつてゐる人はもつと暖かい声を出すものです。然し……然し君、恋は罪悪ですよ。解つてゐますか」（上 十二）と「私」に問いかけ、問答をするがその後すぐに「又悪い事を云つた。焦慮きやうりょせるのが悪いと思つて、説明しやうとすると、其説明が又あなたを焦慮きやうりょせるやうな結果になる。何うも仕方しかたがない。此問題はこれで止めませう。とにかく恋は罪悪ですよ、よござんすか。さうして神聖なものですよ」（上 十三）と言つたきり「私」に対して直接恋の話はしていない。「私」が「先生」の恋愛について知るのは『下 先生と遺書』以前では「奥さん」から話を聞くにとどまつてゐる。

対して金についての話は「先生」自身が自分から詳しく自らの考えを述べてゐる。「先生」が「私」に対して金についての話題を持ち出すのは散歩の最中のことである。細い杉苗の頂に投げかぶせてあつた「先生」の帽子が風に飛ばされ、その帽子を拾つた「私」に古びた縁台のようなものの上に寝ていた姿勢から「先生」は「起きるとも寐ねるとも片付かない其姿勢の儘ままで」（上 二七）問いかけてゐる。

「突然とつぜんだが、君の家には財産が余程あるんですか」

「あるといふ程ありやしません」

「まあ何の位あるのかね。失礼の様だが」

「何の位どつて、山と田地やまが少しある限で、金なんか丸まるで無いんでせう」

この場面で特徴的なのが、「先生」が「私」に対して追求の手を緩めないことである。最初の「先生」の質問に対して「私」は「あるというほどでもない」と曖昧に答えているが、対する「先生」は「私」にもつと具体的に答えさせようと質問を重ねる。「私」と「先生」の問答は、「私」が「先生」に対し質問をし、「先生」の答えを追及していく形を取るものが多いなかで、この財産に関する問答は「私」と「先生」の立場が逆転してゐる。「先生」の財産についての話は更に続く。

「君のうちに財産があるなら、今のうちに能く始末をつけて貰つて置かないと不可いと思ふがね、余計な御世話だけれども。君の御父とうさんが達者なうちに、貰うものはちゃんと貰つて置くようにしたら何うですか。万一の事があ

つたあとで、一番面倒の起るのは財産の問題だから」

「先生」は「私」にそう言うと、人はいつ死ぬか分からないと伝え、「私」に兄弟や家族の人数、親戚の有無、叔父叔母の様子についても質問を重ねていく。そして最後に「みんな善い人ですか」（上 二八）と問いかける。「私」が、田舎者だから悪い人間というほどのものはいない、と答えると「先生」は、田舎者であることは悪い人間ではない理由にはならない、と返し以下のように続ける。

「田舎者は都会のものより、却って悪い位なものです。それから、君は今、君の親戚なぞの中に、是といつて、悪い人間はゐないようだと言ひましたね。然し悪い人間といふ一種の人間が世の中にあると君は思つてゐるんですか。そんな類型に入れたやうな悪人は世の中にある筈がありませんよ。平生はみんな善人なんです、少なくともみんな普通の人間なんです。それが、いざといふ間際に、急に悪人になるんだから恐ろしいのです。だから油断出来ません」

「先生」の話は、現れた犬と子供によつてここで止まってしまうが帰り道に「私」が「いざといふ間際」とはどういう意味なのかを問うと、理屈ではなく事実である、と前置きをしたうえで「金さ君。金を見ると、どんな君子でも悪人になるのさ」（上 二九）と答える。その後「私」に「先生」が興奮するのは珍しいことだと指摘されると、興奮した理由を以下のように話す。

「いや見えても構はない。實際昂奮するんだから。私は財産の事をいふと屹度昂奮するんです。君には何う見えるか知らないが、私は是で大変執念深い男なんだから。人から受けた屈辱や損害は、十年立つても二十年立つても忘れやしないんだから」

この話をするときの「先生」の言葉の調子を「私」は「もとよりも猶昂奮していた」（上 三十）としている。更に「先生」は「私」に尋ねられるまでもなく言葉を続ける。

「私は他に欺かれたのです。しかも血のつゞいた親戚のものから欺かれたのです。私は決してそれを忘れないのです。私の父の前には善人であつたらしい彼等は、父の死ぬや否や許しがたい不徳義漢に変わったのです。私は彼等か

ら受けた屈辱と損害を小供の時から今日迄脊負はされてゐる。恐らく死ぬ迄脊負はされ通しでせう。私は死ぬ迄それを忘れる事が出来ないんだから。然し私はまだ復讐をしに在る。考へると私は個人に対する復讐以上の事を現に遣つてゐるんだ。私は彼等を憎む許ぢやない、彼等が代表してゐる人間といふものを、一般に憎む事を覚えたのだ。私はそれで沢山だと思ふ」

「先生」はこれらの問答をした後日、「私」が「先生」の家に晩餐に訪れた時にも重ねて、油断ならないから父親が生きてゐるうちに財産を分けてもらつておくように助言をしてゐる。これらの「先生」の財産というカネについての発言から、カネは人を悪人にさせ、ときに人に憎しみを抱かせる要素になりえる、という考えを漱石が抱いていたのではないかと考察する。

「先生」がカネについての考えを語つてゐる場面について考察していく中で、「先生」と「私」が財産について問答している場所に注目した。

「先生」と「私」の財産に関する問答が始まるきっかけとなつたのは風に飛ばされた「先生」の帽子を「私」が拾つたことである。帽子が被せてあつたのは「細い杉苗」だつた。成長した杉ではなく、杉の苗にすることでより若さを象徴させる効果が考えられる。さらに「細い」という形容詞を用いることによって、ただ若いというだけではなく弱弱しさも同時に表現されている。その杉苗の「枝」ではなく「頂」に「先生」は帽子を被せていた。その帽子が風によつて取れ、「先生」の昔の体験を交えた問答が開始されてゐることから、「先生」の帽子を杉苗の頂に被せるという行為は、「先生」が若く弱弱しい時代のことに上から蓋をして思ひ出さないようにしてゐたことを示唆してゐるよう考へられる。そして蓋である「帽子」が取れたということは、思ひ出さないようにしてゐた記憶が思ひ起こされたということである。しかし昔のことを思い出しても今の「先生」にはどうしようもない。自分を裏切つた相手に復讐することもなく、人間を憎むことで十分だと思つてゐるため「先生」は行動の起こしようがないのである。一方で「私は是で大変執念深い男なんだから。人から受けた屈辱や損害は、十年立つても二十年立つても忘れやしないんだから」(上 三十一)とあるように「先生」の心情として今の状況に満足してゐるとは決して言い切れない。そのような本音と建前の板ばさ

みとなった中途半端な「先生」の状態が「起きるとも寐るとも片付かない其姿勢の儘で」（上 二七）で「私」に問いかけをしたことに表れていると考えられる。

更に力ネに関する問答の場面でもう一つ注目したい点がある。それは「先生」と「私」の位置関係である。「先生」は「古びた縁台のやうなもの」（上 二六）に寝ており、「私」は「其余つた端の方に腰を卸し」（上 二六）自分のことを「包む若葉の色に心を奪はれて」（上 二六）いる。つまり「先生」と「私」は距離が開いているものの一直線上に並んでいるということになる。「若葉」に包まれているという「私」についての描写は「私」の若さを象徴し、加えて一つ一つの若葉の色が違ふと分かるほどに「心を奪はれている」ということは、他のことが目に入っていないということでもある。この描写は若さゆえの盲目ということを表現していると思われる。対して「古びた縁台」の上に居る「先生」の姿は、年を重ねているということを象徴している。「先生」と「私」が一直線上に居るという関係は実際に二人がいる場所を表すだけではなく、「先生」が経験したことを直線上に居る「私」も経験する可能性があることも示唆する効果がある。財産問題に注目してみると、「私」自身は「兎に角若い私には何故か金の問題が遠くの方に見える」（上 二九）と金について重きを置いて考えていないが、「先生」のほうは「私」に何度も金についてのアドバイスをするので「私」が問題に遭わないように気を回している。「私」が考え方を変えなければ、父親の遺産相続の問題で「先生」のようにトラブルになる可能性は捨てきれない。「先生」と「私」の位置関係は、「私」がこれから遭遇する金銭的トラブルの可能性を暗示する。さらに金銭や財産の問題は人間の生活から切り離せないということも表現していると考えられる。

4

「私」自身は力ネや財産について深く考えているわけではない。それは「私」がまだ社会に出ておらず、また金銭問題に直面してもいなかったからである。しかし「私」の周囲にも直接的ではないものの財産についての問題は存在して

いる。「私」を取り巻く力ネについての言及は、『中 両親と私』の中で「私」の両親が気にしている周囲の目や世間体を通してなされている。

「私」の両親は、事あるごとに周りに対していい格好を見せようとする。「私」が田舎に帰る際には母親が「私」に以下のような手紙を書いている。

私は鞆を買った。無論和製の下等な品に過ぎなかつたが、それでも金具などがぴか／＼してゐるので、田舎ものを威嚇かすには十分であつた。此鞆を買ふという事は、私の母の注文であつた。卒業したら新しい鞆を買つて、その中に一切の土産ものを入れて帰るようにと、わざ／＼手紙の中に書いてあつた。

そして「私」が田舎に着いた後には父親と母親が近所の人々を招いて祝おうとする。「私」が宴会を断ると父親は「呼ばなくつても好いが、呼ばないと又何とか云ふから」（中 三）と渋る。さらに父親は「東京と違つて田舎は蒼蠅いからね」と続け、母親は「御父さんの顔もあるんだから」（中 三）と父親を援護する。「私」が自分のことを口実にするなと言うと、父親は「さう理屈を云はれると困る」（中 三）と苦い顔をし、母親は「何も御前の為にするんぢやないと御父さんが仰しやるんぢやないけれども、御前だつて世間への義理くらいは知つてゐるだらう」（中 三）と返す。ここでの「私」と両親の議論は話がかみ合っているとは言いがたい。「私」の両親は「私」の意見など聞くつもりはなく、自分たちの意見を貫こうとしているに過ぎない。自分たちが近隣住民から悪く言われないようにするために何とかして体裁を保とうとしている。

この場面で注目したいのは、「私」と両親の考え方の違いである。両親は体面をよく見せるということに重きを置いているが、「私」は見せ掛けのみの華やかさを快く思っていない。「私」は、母親が「新しい鞆を持って帰るよう」という手紙に対しては、

私は其文句を読んだ時に笑ひ出した。私には母の料簡が解らないといふよりも、其言葉が一種の滑稽として訴へたのである。

という感想を抱き、近所の人々を呼んで宴会をすることに反対した理由としては、

私は田舎の客が嫌だつた。飲んだり食つたりするのを、最後の目的として遣つて来る彼等は、何か事があれば好いといった風の人ばかり揃つてゐた。私は子供の時から彼等の席に侍するのを心苦しく感じてゐた。まして自分のために彼等が来るとなると、私の苦痛のいっそう甚しいやうに想像された。然し私は父や母の手前、あんな野鄙な人を集めて騒ぐのは止せとも云ひかねた。

としており、名目と実態が合っていない宴会に対して辟易しているさまが読み取れる。大して財産を持っていないにも関わらず、「私」に新品の袍を持たせたり、宴会を開くことで自分たちの息子が大学を出たことを広く知らせようとしたりする両親の姿は、「私」の考えとは相容れない考え方なのである。この「私」と両親の考え方の違いは後の場面にも見られる。それは「私」の大学卒業後の就職先についてである。「私」は卒業したばかりの身である自分では、まだたいした収入を得られない事を客観的に理解しているが、両親は「不相当な地位と収入とを卒業したての私から期待して」（中 六）いる。父親は、「私」に現実には合わない期待を掛ける理由として以下のように話している。

「然し卒業した以上は、少なくとも独立して遣つて行つて呉れなくつちや此方も困る。人からあなたの所の御二男は、大学を卒業なすつて何をして御出ですかと聞かれた時に返事が出来ない様ぢや、おれも肩身が狭いから」

つまり、「私」の父親は「自分の立場」や「世間から自分がどのように見られるのか」という主観的な考えに基づいて物事を考えているのである。「私」は父親の考え方について、以下のように思考している。

父の考へは古く住み慣れた郷里から外へ出る事を知らなかつた。其郷里の誰彼から、大学を卒業すればいくら位月収が取れるものだらうと聞かれたり、まあ百円位なものだらうかと云はれたりした父は、斯ういふ人々に対して、外聞の悪くないやうに、卒業したての私を片付けたかつたのである。

『中 両親と私』の中には、「私」と「私」の両親の間にある「世間体」についての考え方の違いが対照的に書かれている。そして、周囲の人々に対して裕福であるように見せようとする「私」の両親を通してカネについての言及を行っている。「私」の両親は「私」に新しい袍を買つてくるように言ったり、宴会を開こうとしたり、大学を卒業したばかりの「私」に対して不相当な就職先への就職を要求している両親の姿は、自分たちは裕福であるかのように周囲に見せ

たいという「世間体」を重視した主観的なものの見方であり、地位のある人や収入の多い人が立派な人物であるという考えが表れている。そのため両親の考えは物事を客観的に見ている「私」の考えとは食い違いが生じる結果となっている。「私」の両親の姿は、周りの目を気にするあまり現実とはそぐわない地位や収入を求め、外見的な富裕さに囚われがちになっているために現実が見えなくなっている。

これらのことから、カネを求めすぎることが、時に物事を正確に思考することを妨げるということも表現されていると考えられる。

5

今回の論の最初に、『心』には新しい考え方に古い考え方が排されていく様子が描かれているという仮説を立てたが、考察を進めていく中で考えを新たにした。それは、古い考えは時を経ることに確かに新しい考えに押し遣られるが、古い考えが完全になくなることはないという考察である。人を介して形を変えながら、時代を経ても残り続けているということが「K」から影響を受けた「先生」と、その「先生」から影響を受けた「私」の姿に表れていると考えた。「先生」は、

私もKの歩いた路を、Kと、同じやうに辿つてゐるのだといふ予覚が、折々風のやうに私の胸を横過り始めた
とあるように「K」のような人生を歩んでいると自覚するに至り、「私」は「先生」について、

かつて遊興のために往来をした覚のない先生は、歓楽の交際から出る親しみ以上に、何時か私の頭に影響を与えてゐた

と考察している。「先生」にとつては「K」、「私」にとつては「先生」が持っていたはずの古い考えが、相手と交流をしていく過程でいつしか自分の考えとして定着していったということが伺える。西欧文明と日本文明の二つの制度が混ざり合っていた明治大正期の社会情勢に照らして考えるならば、西欧から新しい制度が流入してきたとしても日本に昔か

ら存在してきた体制が完全になくなることはなく、形や仕組みを少しずつ変えて残っていくということにも通じる。

本論中で取り上げたもうひとつの論点である金銭問題もまた時代が變つても人々の生活の中に残り続けるものである。「K」は実家と養家からの勘当による困窮、「先生」は親族達による両親の財産横領、「私」は両親の体面を優先した現実味のない要求といったように形は違えどもなんらかの金銭問題を抱えている。「私」についてはまた具体的な問題には直面していないが、「父」が危篤状態にあることと、

私は突然立つて帯を締め直して、袂の中へ先生の手紙を投げ込んだ。それから勝手口から表へ出た。私は夢中で医者の家へ駆け込んだ。私は医者から父がもう二三日保つだらうか、其所のところを判然聞かうとした。注射でも何でもして、保たして呉れと頼まうとした。医者には生憎留守であつた。私には凝として彼の帰るのを待ち受ける時間がなかつた。心の落付もなかつた。私はすぐ俵を停車場へ急がせた。

とあるように、「先生」に会うために「父」を看取することもなく東京に戻つてしまったことから、「父」の死後、遺産相続の問題になったときに何らかの不利な状況に直面する可能性は大いにある。金の問題は人の生活とは切り離せないものであるということは始めに立てた仮説と大きな差異は見られなかつたように思う。

今回『心』の作品研究は、「先生」と「K」と「お嬢さん」の三角関係という切り口ではなく、作品中に表れる力ネの問題や人の交流の中で伝えられていく思考について着目して考察を進めていった。その中で着眼点が変わればテキストの考察も變つていくことを知った。今後、図書を読んでいく中でも一つの考え方に捉われず、柔軟な読解をしていきたい。

注

- (一) 江藤淳 『人と文学』(『夏目漱石集』(二) 現代文学大系14)、筑摩書房、昭和39・12)
- (二) 桶谷秀昭 『淋しい「明治の精神」——『心』(猪熊雄治編『夏目漱石『心』作品論集』、クレス出版、平成13・4)
- (三) 小田切進 『新潮日本文学アルバム2 夏目漱石』(新潮社、昭和61・12、第七刷)

(四) 藤田榮一 『漱石と異文化体験』 (和泉書院、平成11・3)

(五) (四) に同じ。

(六) 夏目金之助 「断片八」 (『漱石全集 第十九卷』、岩波書店、平成7・11)